



師走になり、なにかと多忙のことと存じますが、お変わりありませんでしょうか。今年も蓮文化研究会の活動にご協力いただき感謝申し上げます。一月には総会があります、是非ご出席ください。蓮通信46号をお届けします。

第12回蓮文化研究会総会開催のお知らせ

日時 2010年1月23日(土)
開場 13時
総会 13時15分～14時
引き続き蓮の情報交換会
講演会 15時00分～16時30分
講師 会員有志

演題 「中国とロシアの北限の蓮」
場所 豊島区立勤労福祉会館6階第7会議室
東京都豊島区西池袋二・三七・四
電話 03-3980-3131

懇親会 17時頃より池袋近くの居酒屋で新年の懇親会を開きます。ご参加下さい。
会費 四、〇〇〇円

※総会及び懇親会にご出席の方は、1月15日までに同封ハガキにて事務局へご連絡下さい。
※総会にご欠席の方は1月15日までに、同封の委任状にご記入の上ご返送下さい。

※総会には多くの方々の出席を願っています。会員の方で、まだお会いしていない方も大勢いらっしゃると思います。特に関東在住の方やお時間の都合のつく方はぜひご出席下さい。

講演会

今回「中国とロシアの北限の蓮調査」に参加された方々が『蓮文化だより』に、調査報告を寄稿しています。紙面の都合で紹介できなかった事や、掲載できなかった写真などを紹介したいと思います。

講師 南定雄、三浦功大、池上正治、千島秀元、上村皓彦、土肥哲英、山本和喜、その他。

『蓮文化だより14号』発行

『蓮文化だより14号』の編集は順調に進んでいます。今号には21名より玉稿をいただきました。特集は「中国、ロシアの北限の蓮調査」です。北緯45度のハルビンから北緯47度のロシアのピロビジャン付近の湖に広がる野生蓮調査です。また、今は、ほとんどが関東大震災で焼失した、俄屋宗達が下絵を描き、本阿弥光悦が百人一首を書いた『蓮下絵和歌集』のモノクロの画卷が残っていますので、全容を紹介します。現在諸処に九点程の断巻が所蔵されているものは、カラーで紹介します。

新会員紹介 (10月～11月に入会された方)

村上順子 〒三〇九・一七**
茨城県笠間市**・**・**
電話 0296・**・**
FAX 0296・**・**
E-mail mu-***@au.wakwak.com
新妻 修 〒二二九・一一**
神奈川県相模原市**・**・**
電話 042・**・**

『蓮一〇〇の不思議』の出版につきましては、多数の会員のご協力有り難うございました。おかげさまで在庫がほとんど無くなってきました。お再版に期待がかかりますが、ご希望の方は早めに出帆新社へ。
中尾紗英子会員、読者、ネットに感想などが寄せられていますのでご紹介します。

好しかった点。

1、科学的な説明が含まれている。
Q011、Q012、Q022、Q031等。
「蓮が最新の科学、化学、薬学の分野から研究される」のが興味深い。蓮の科学研究の成果が、ナノテクノロジ、バイオテクノロジの分野で評価され、社会や生活に役立つ新製品(発明)として次々に登場する日を待っている。

2、装丁・写真が美しい。
花の写真で最も難しいのが色彩。特に青・青紫・紅色の花は、実物を再現するのが難しい。蓮には、マゼンタ(赤紫・紅桃)の花色が多い為、実物より淡い色に写り易い。本の写真は花色の再現に気を遣っている。

惜しまれる点。

1、説明の補足を希望する。Q044「蓮の香水」の価格を載せてほしい。Q098、099にある海外の蓮専門書については、別の機会にページの一部でも訳して紹介していただきたい。
2、資料リストが無い。この本の完成には、膨大な資料・文献を参考にした事が窺える。情報の出典や参考文献のリストを全て載せてほしい。
3、執筆者の名前。どのインシヤルが誰なのか、明確にしてほしい。

編集後記に「会員諸兄妹はじつに多士済々と有り、「その力を結集すれば」ともある。今後は、より多くの才能に会員が協力しあって活動出来る日の実現をねがう。

ネットに於ける感想の様子

栃木県芳賀町図書館ホームページ
蓮の世界の原産地や蓮の実から開花させる方法、世界各地の蓮の切手、専門書など、蓮に関する一〇〇の不思議を写真と共に紹介。
AMAZON.COM
価格 3232円 配送料340円
コメント:新品未読商品希少品のため定価(2835円)よりも高額ですが、ご検討を。

JUNKUDO BOOK WEB

現在書棚は、花卉園芸です。在庫なし 現在この商品のご注文いただけません。本書が蓮の花の見直しの一助になれば幸いです。

朋あり遠方より来たる

「朋あり遠方より来たる また楽しからずや」というのは『論語・学而』の名句です。それをフランス語でどういふかは知りませんが、去る11月11日の夜、池袋で、そんな交歓シーンがありました。フランス在住の会員で、言語学者で、画家のヴィラー雅子さんを囲んで、有志たちが集まったからです。彼女は会誌13号に「フランスの蓮祭り」「フランスにヨーロッパで初めて野外で蓮の花が咲く」という2力作を寄せています。また、昨年の10月、例会（第42回）でも話をしてくれました。

今回も10月の例会に出席予定だったようですが、11月の帰国になりました。懇親会では、参加者9人の自己紹介の後、ヴィラーさんの話が弾みました。蓮との関わりは約四〇年前、生地のお盆から始まり、ルクソール（エジプト）でロータスとの鮮烈な出会い、さらには画業のなかの蓮、文献学的な蓮の探求、蓮文研との出会いなど。今後とも成果を期待し、再会を約束してお開きでした。

蓮のカレンダー頒布

宇都宮城跡蓮池再生検討委員会主催、「第七回栃木花蓮写真展」で上位入賞作品と、与謝蕪村の俳句を組合わせた、2010年版のカレンダーが出来ました。頒布します。

版形 A4判横 8枚16面
 価格 1000円送料込
 申込 問合せ 印南理事へ
 電話・FAX
 028-663-1313



11月末の会員数

現在の会員数は??名です。会員名簿は一月末発行予定です。ご希望の方は、総会委任状に名簿希望とお書き下さい。2月初旬発行の総会報告書に同封します。

土肥哲英理事「さくやこの花館」 2009フォトコンテストで海外優秀賞

今夏、中国・ロシアの北限の蓮調査の時、黒龍江省の東端、月牙湖で撮影した作品が海外で撮影した部門の「海外優秀賞」に輝きました。（写真左）



おでんの名称

三浦 功大

師走になり温かい「おでん」の美味しい季節になりました。おでんの名称が蓮の実飛ぶからきているようです。古河三樹著『図説庶民登能江戸の見世物』(雄山閣1982年)の「蓮飛」の項に次のように載っていました。

蓮飛（れんとび）連飛とも書いて、もと田楽に付属した高足伎の一転したものである。

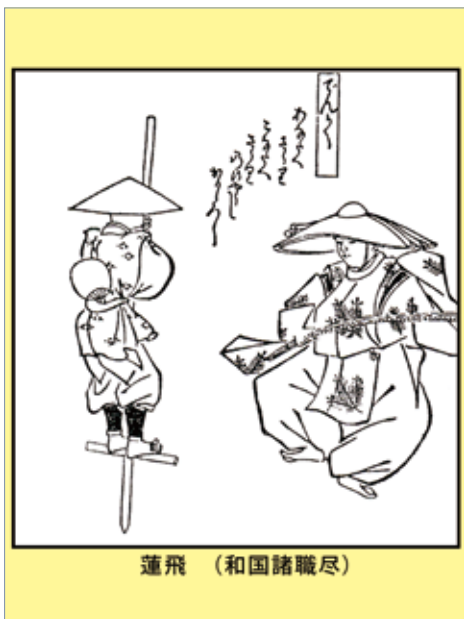
元来高足伎は、奈良朝時代に支那伝来の散楽雑戯の一種であったが、平安時代に至って田楽の付属になったものである。故に蓮飛は蜘蛛（綱渡り、竿登り、とんぼ返り、などの諸技を取り入れた技）から出たものではなく、蜘蛛と共に田楽法師が錬磨した結果、田楽から分離独立して、勧進興行したものらしい。

『嬉遊笑覧』に「しきりに飛の義にはあらで、蓮の実のかたなるべし。」また『洛陽集』（延宝八年）に「軽業

は蓮の実より事起れり」とあるから、演者が高足にのって、飛び跳ねる有様は、さながら蓮の実の飛ぶ様であるとの意味か、或いは連（つづ）けさまに飛ぶということから、曲飛びの芸を命名したのだろう。

古くから京都の四条河原で興行していた、万治元年本『野良犬』京都吉兵衛座の条に、「れんとび権之助内加川右近」とあり、また『京都御役所向大概書』に、「れんとびの名代として唐人与左衛門なる者がいたことが記されているから、万治寛文年間には、すでに俗人の手に移って見世物小芝居で興行されたが、享保頃には蓮飛人形という玩具に作られる程の流行をきわめた。だが、宝暦期に至り蓮飛の芸もこの名称も滅んだことは『歌舞伎事始』（宝暦12年）に、「蓮飛唐人与左衛門今は無し」と、すでにその名代の断絶したことが見えている。なお『好色一代男』（天和2年）江戸茶屋の条に、「品川のれんとび」とあり、『寛潤平家物語』（宝永7年）に、「目黒の茶屋女品川れんとび」と私娼の異名をあげている。

蓮飛というものは、元来種々の曲芸的要素を持つている田楽から選びだされたものである。たとえば一本の棒に横木を打ちつけ、それに乗って一本足で飛び歩く曲芸であるが、これは田楽の諸芸の中でも印象的であったところから、田楽刺しという言葉も生れ、また豆腐に串を刺して焼いて味噌をつけたものを田楽と言ったのは、この形が串に刺した豆腐の形に似ているからで、おでん（お田楽）という食物の名称になったといわれている。



蓮飛（和国諸職尽）

儲福金著（中国『小説月報』
2009年第7期）
蓮舞（短編小説）



中国の小説が好きという人なら、きつと『小説月報』を定期購読しているだろう。全国の各地で「雨の後の夕ケノコ」のように発表される小説（おもに中編と短編）の中から厳選し、レベル以上のものを再録しているからだ。主管＝天津市新聞出版局、出版＝百花文芸出版社で、毎月1日に発行、定価が6.5元（約100円）。

日本まで取り寄せている『小説月報』だが、到着した日にざっと目次を見るくらいで、ふだん精読することはあまりない。だが、今度はやはり例外だった。

「蓮舞」というタイトルが、目に飛びこんできたからである。著者の儲福金（チュー・フーチン）も初めてみる名前だ。一気に読んだ。赤鉛筆をもち、主人公や重要なシーンに赤線を引きながら、もう一回。A5版で6頁という、小小説だが、著者の蓮にたいする知識は、ハンパではない。しかも最近の農村で、蓮がどのように扱われているか、それを知るうえでは格好の内容であるように、思われる。そんな理由から、この「蓮舞」を簡単に紹介する。

主人公＝李尋常（リー・シュンチャン）農民から「幹部」になり、ご縁あって20年ほど蓮にいれ込んでいる。阿蓮（ア・リエン）＝李の妻で、善良かつ純朴な性格。方堅強（ファン・チエンチャン）＝李の年来の友人。達西（ジャシ）＝チベット族で、李がアジャハ（雲南）まで蓮を調べにいった知り合う。神出鬼没の旅人。

登場人物はこの4人。文頭では、蓮の花束を手にした李が、村役場の玄関に登場。浅黒い顔、その身なりが農民然としていることから、門衛がストップをかける。李がここに来るのは初めてではないが、今日の門衛は知り合いではない。サア困ったと思っていると、携帯が鳴る。妻の阿蓮からで、帰ってこい、というのだ。仕方なしに李は、くだんの花束を門衛にプレセントしながら、「これね、千弁蓮というの、ほら、いい香りだろう。たくさん花びらがあつて、綺麗だし、食べられるんだよ」と言いおいて、帰ろうとする。背後で、クラクシヨンが

鳴り、高級車。後部座席の人を、見るともなしに見た李が、大声で「方堅強、お前も偉くなったもんだな！」と。唾然とする門衛を尻目に、2人をのせた車は、敷地内へ。

方「いつまでも、あんな狭い面積で満足していないで、蓮池を拡大し、ホテルでも建てて、大儲けしなよ」

李「お前は、口を開けば、商品化だ、金儲けだ、それは資本家の理論だ。おれは蓮の研究をしているんだから」

こんな会話をする2人である。出身は農民だが、20年以上も前、試験に合格して「幹部」になり、ともに苦労をした仲だ。不動産業へと転身した方は「左うちわ」となり、李はその後も農業に。今日の目的は「蓮の品種の申請など」だった。ところで、李と蓮の関係、ある日の「幻影」、そして妻となった阿蓮との出会い、こうだ。

蓮を植えて、その花を観る、それこそが李の念願である。花の色の多様性に、彼は深く惹かれた。蓮を植えて二〇年になるが、もし食用の蓮だけだったら、この昔に蓮など止めていただろう。毎年のように、これまでに無かった色の蓮が咲く。もつと多く、というのが彼の希望だ。青い蓮は？と彼が思ったのは、いつだったろうか。それはお寺からの帰り道だったようだ。ある感覚というか、幻影のようなものが、彼を襲った……青い蓮の花のうえて、真っ赤な衣装の女が踊っている！

その直後、彼は、ある女性と遭遇する。ほっそりとした体に、赤いブラウスを着ており、その名も「阿蓮」だという。李は瞬間的に、嫁さんにしよう、と決めた。

さらに作中では、李が作り出した新品種の「江南好」や、お気に入りの「並蒂蓮」、さらには「アジャハ蓮」などの描写がある。並蒂蓮を例にとれば、次のようである。

（たまにでる）並蒂蓮を、李は食い入るように凝視する。それは2つ花托をもっており、花びらも、ちょうど一對となっている。蓮にも心があると、彼は信じている。偶然のこと、蓮の花に触れたりすると、まるで震えるように動く。それは花が喜んでいからだと、李は思う。

女房の阿蓮が喜ぶことといえば、それは旦那が蓮に見入り、夢中になっているのを見るときである。彼が夢中になり、忘我の境地になるのは、2つの場合だ。

一つは蓮の花に魅せられている時、もう一つは本を読んでいる時、だ。

どうやら李は、ただの蓮農ではないようだ。「おれの話には、文化というものがある」というのは、彼の口ぐせだった。旦那の話はときに、女房の理解レベルを越えるが、それがまた夫への敬意を増幅させるのだった。今回は紙幅の都合でパート訳だが、末尾は、感動的だ。

（風のこづくに来訪した）達西を、李は自宅の蓮池ちかくの亭（あずまや）に誘い、一席を設ける……まずは、清涼感のある荷葉茶を一杯……それから阿蓮の手作りの料理がつづく……蓮子スープ、蓮の花をあしらった冷菜、蓮の茎の炒め物、蜂蜜づけのレンコン、レンコンの飴煮、レンコンいりクレープ、もち米をつめたレンコン蒸、蓮の葉ちまき、蓮の葉でつつんだ焼鳥、蓮の花を浮かせたスープ等……

「旅はいい。西藏では空と高原がつながっており、新疆には無限の砂漠が、東北では見はるかす黒土……」と達西。「おれが好きなのは、この自分の蓮池で、蓮をながめることだ。見ろ！風に舞う蓮を。蓮の花には魂があり、仔細にながめれば、蓮のなかに天地自然がある……」と李。興にのった達西が、蓮の葉のうえに酒をそそぐ。多すぎて、こぼれそうになり、急いで呑もうとする達西。こぼしながらも酒をすすったため、咳きこむ。大笑いする李夫妻。

「これは、夢か？」と達西。かすかに首をふる李……

よく呑んだ、よく喰った。李は達西の肩をとり、蓮池の淵ちかくを歩きはじめた。月下の観蓮、である。新しく作り出した品種の蓮を、懐中電灯で照らしながら、説明するが、どちらも千鳥足だ。左右に、前後に、揺れ動く2人の酔漢。その姿が月光に照らされ、蓮の池に映る。あたかも蓮とともに舞っているようではないか！その背後から、笑いながら、くどくど言いながらも、そっと付いていく阿蓮の姿があった。

作者の儲福金は、1952年上海生まれ、南京大学（中文系）卒、長編小説『心之門』など多数、一級作家、江蘇省作家協会副主席、宜興に在住。

（文責＝池上正治）

まだあった「お練」

— 学園祭のなかの二十五菩薩来迎会 —

池上 正治

「これで全て『お練』を観たことに」と会誌の第13号に書いたことを、後悔しながらの京都行となった。あえて「全て」とタイトルに書いたのには、理由がある。それまでに、奈良の當麻寺 さすが「本家」には千年の歴史が… 和歌山の得生寺 少女たちの和讃があり、清らか… 岡山の誕生寺 けっこう長い道を歩いての行事だ… 兵庫の太山寺 少人数だが、子供たちが元気一杯… 長野の十念寺 踊り念仏の系譜にあり、仮面を拝見… 大阪の大念仏寺 さすが見せ場が随所に作ってある… 京都の光明寺 本堂を周回しての華麗な練り歩きだ… 奈良の久米寺 仙人の寺では、大盤ふるまいだった… 東京の浄真寺 3回の移動があり、珍しい様式だ… 京都の泉涌寺 やはり洗練され、山伏と意気投合… という具合に、かなり集中して、日本各地の「お練」を現地に取材してきた。資料や史料、ネット画面には、これ以外にもあることになっている。しかし実際に、現場とコンパクトすると、岡山県の弘法寺や奈良県の矢田寺などのように、「休止中です」「今後（やる）見込みは、ありません」という「お練」もあつた。それで、現時点では「全部」であろうと判断し、「観止」を決めたのだ。つた。

蓮仲間の金子明雄さん（京都府立植物園）から、「遅くなりました…」というメールがきた。ある大学で、二十五菩薩来迎会をやるというのだ。まさか？ いくら京都でも、寺ならぬ学園で「お練を」？ という気持ちである。現地まで確認すると、それは正しい情報だった。

10月30日、東京駅から7時の「のぞみ」に乗る。京都着は9時20分、近鉄に乗り換えて、20分ほど、向島（宇治市）で降りる。あとはテクシーで、団地やゴルフ場、市民農園らしき緑地を見ながら、ゆっくりと。初めての場所を、そぞろ歩くのは、年来の楽しみの一つである。

「京都文京短期大学は、この道でいいですか？」と、一本道なのだが、念のために、聞いてみる。返ってくる言葉が耳に優しいのも、また嬉しいことだ。

それは学園祭のなかの文化公演「二十五菩薩来迎会」だった。学園祭のなかに身をおくのは、何十年かぶりだ。とても華やかなのは、女子学生が多いからだろう。通路の両側にはズラリと屋台がならぶ。食欲は若者の特権だ。

こちらが目ざす「同昌館」は、その賑わいの奥にあり、一階が落ちついた講堂だった。演台まで3層ほどの最前席に陣どる。開演の11時まで30分ほどあり、振り向けば、来客は50人ほどだ。その4倍ほどの空席がある。

開演に先立ち、安本学長から挨拶があつた①。ご自身がこの行事に非常に関心をもち、機会があれば「お練」の現場まで足を運ばれているという。これで、納得だ。解説があつた。二十五菩薩来迎会の歴史と現代的な

意義は、映像を用いながら、當麻寺の川中光教・奥院住職の担当である②。これ以上の「役者」はないだろう。国宝の曼荼羅のほかに、3本のレプリカがあること、その復元の苦労や前後のエピソードなどは興味ぶかいものだった。

そして実演である。しかも、観音菩薩を演じるのが山田裕清さん、勢至菩薩を演じるのが下村雅英さん、と実名が披露される。演台の右手から、和讃に合せて、2位の菩薩がシズシズと登場してくる。1歩進んでは、半歩もどるといふ、例の足取りである。力のいる姿勢だ。華麗な衣装であり、金面である。この新面については『蓮文化だより』第11号（2007年）の拙稿で報告した。

いよいよ演台の中央、祭壇に鎮座する中将姫を、蓮華座に移す瞬間である。本番であれば、それは娑婆堂で行なわれるため、一般の参観客からは見えないシーンだ。姫の像と蓮華座をささげもつ観音、その左右と上下に手をかざし動かす勢至③…この秘儀を目のまえにして、会場は静まり返っている。やがて、姫の像を高くかかげながら④、舞台の左手へと、練り歩いて退場する菩薩たち…⑤

至近距離から秘儀を見ると、得がたい体験だった。川中住職の「今日きた人は、たいへん得をします」という話は、その通りだった。講堂をでると、そこは学園祭の喧騒だった。学生たちにも「お練」を見せたかった、などと思いつつ、帰路についた。



① 開会の挨拶をする安本義正学長



② 解説をする當麻寺の川中光教（奥院）住職



③ 観音と勢至の2菩薩が、姫の像を蓮華座に移す



④ 姫と蓮華座を高くかかげ、練り歩く



⑤ 2菩薩がゆっくりと退場する

ドライフラワーになった蓮花

千島秀元

もうこの世に居られない方ですが、平成10年頃に富士宮市にある「花工房三皇」の社長だった川瀬逸子さんと、自然医療の情報交換を盛んにしていました。

彼女はユーカリの樹液が毛穴から化学物質や老廃物を効率よく吸い出すことを発見し、これを製品化した人物でした。この樹液パウダーを和紙の袋にパックしたものは肩こり、打撲など様々な炎症を速やかに回復させる優れもので、活用に熟達すれば大変重宝な物です。

彼女は元々はバラなどの綺麗なドライフラワーを製作しておられました、植物の油脂の薬効を体感したといっていました。皇后様にも献上申し上げましたと、自慢されていました。蓮の茎の乳液の薬効や、香りの癒しなど話は尽きませんでした。

蓮のドライフラワーは無理でしょうか？と聞きますと、「あの花は水分が多く、乾燥すると茶褐色に変色し形を保つのが難しい」とのこと、「花自体が散りやすく、真空乾燥機でフリーズドライにでもしないと無理かも？」ということでした。

姿を心（情報など）の現れと観れば、蓮の花の形に

も他の花と違った心の感受があります。散らないままで乾燥した形を残せたらどうだろう？と、その興味は気持ちの奥に留まりました。蓮の心を譬えるところのような？という、深く尽きない関心があったからです。



重台蓮のドライフラワー アップ

蓮花は4日間の美しくも、はかない命です。うぐい、美人薄命かな…。と、思いを巡らせば、豪州の9ヶ月も次々咲き続ける野生蓮は魅力的ですが、日本、中国における一夏に、蓮の涼感はやはり格別。

敗荷は有終の美を思わせませんが、若々しき老いの美学となれば話は別です。

10月22日、梅の木がかなり葉を落として、蓮鉢に水を注いでいた家内が、「お父さん重台蓮が咲いていたよ！」

と、走ってきました。「えっ？ うそー！」と思いました。が、行ってみると、何と枯れきった茎にドライフラワーの蓮（写真上のように）が垂れ下がっていたのです。

花のサイズは高さ4.5cm、短幅5cm×長幅7cm、外側の最も大きい花弁は、長さ6cm幅4cm程です。残念ながら、梅の木の葉に隠れて咲いていたため花を観ていませんので、咲いた時点でのサイズからどのくらい縮小したのか不明です。

分解して中を覗けば、開花1日目か2日目か判明しますが、それ以上の意味が無く愛着を感じます。このまま保存し姿を楽しむことにしました。

蓮のドライフラワーを作れないかな？と10年も前から時々考えていたら、気づかないうちに天然のものが出来ていたのです。十年一昔、重なる当会創立以来の年月を、つくづく「光陰矢の如し」と感慨深くかみしめ、これを公開することにしました。

多分1日目か2日目に茎が折れて花が散らずにぶら下がったのでしよう。梅の樹下に隠れ適度な温度湿度で花の形を留めたようです。

梅雨期にせっかく大きくなってきた花芽が、次々と枯れて無残な姿を見せる事があります。「嫌なことは忘れよう。」と、次の花芽を心待ちにし、枯れた花芽を顧みる気はしません。

この為か、花の形を綺麗に留める天然乾燥の蓮が出ることなど思いも寄りませんでした。

自然の成せる技に感服しましたが、このことで「そうか！ 散らないうちに逆さ吊りにして、陰干しすると人為的に作れそうだな！」と、良からぬ？ 思惑もチラリと脳裏をかすめました。

こんなことを書くとは、何だか悪いことを唆すような気もしますが、ドライフラワーもまた活花に組み込まれた文化の一つです。化学テクノロジーを駆使して茶褐色に変色していない、もっと綺麗な色のドライフラワーが出来たらと、花を愛でる女性が喜びそうな新しい時代の光景が浮かんできました。

華道界にも登場したら？と、面白い気がします。このような生活や儲けごとの足しにならない閃きには、爽やかな楽しさが感じられます。



重台蓮のドライフラワー発見

今年5月20日に、北海道のサロマ湖から約7km南下した所にある、天台宗多門寺の法嗣、長野祐順君に青菱紅蓮、ミセス・スローカムの蓮根を送りました。
 「実家が農家なので、多分咲かせられると思います。」と彼は、「そこ（湖から12km南下、常呂郡佐呂間町若佐）に鉢植えします。」と言っていました。
 ひと月程鉢に浮かして、成長具合を覗みながら北海道



北海道 サロマ湖付近に咲いた蓮 千島秀元

の気候を見計らっていたのですが、今年は根付くだけでも（来年度の蓮根が出来れば）と心配しつつ、毎年「植替実習の例会」で配布している『マニュアル』を同封しておきました。
 11月24日、久しぶりに長野君に会うと、目を見開き嬉しそうちに、

「赤いのが一種類咲きました」と、報告を受け、「うあーラッキー」と気分が高揚しました。

「いつ、何本咲いたの？」
 「9月4日から3本です。」
 「凄いな〜今年は咲かないと思ってたよ！ 色は？」
 「赤かったです。」
 じゃ青菱紅蓮の方だったのか、よかった。と、高ぶる気持ちを抑えて思わずニコッ。



「いや〜、もう一本が咲かなくて」と、長野君が少し表情を曇らせました。
 「気にしないで！また送るから。」と、いつて気分を直してもらい銀座で別れました。

北海道の蓮は、2006年の会誌10号14〜15頁に当会の南会長が調査結果を発表しています。右の地図に見られる箇所（各/白色の▼印）がそれです。

佐呂間（上/黄色の▼印）に蓮の蓮を咲かせるのはおそらく記録上初めてでしょう。佐呂間は昨年の積雪は最大70cm程で、5月始めでも日陰には雪が残っていますが、



夏は気温が30度を超えるときもあります。しかし、8月でも15度以下となることもよくあり、こうなると1日10cm以上ものスピードで成長する蓮の花芽や、蕾、茎などには致命傷でそれっきり成長が止まります。
 道南、亀田郡七飯町（下/黄色の▼印）の親戚に私の送った蓮があり、毎年冬場は鉢を池に沈めて越冬させ、5年ほど連続咲かせた実績を残しています。

過去に清里町（澄色の▼印）で、「誠蓮」の水田植栽の成功例があるので期待と心配が入り交じっていました。
 最近の気候は、内陸部の乾燥（低温下）と、海水の高温化が目立ち、日本は列島ですから北海道も気候的にかなり暖かくなって来ています。道南の松前沖では大型のクロマグロがかなりの水揚げと聞きます。10年前にはあり得ないことでした。そんなこともあって大丈夫と判断した時期と、写真のようにビニールハウスで時々急低下する外気温から守って育てたことが功を奏し、3本も咲かせることに成功したのでしよう。

12月2日、長野君のデジカメの液晶画面を覗かせて貰うと、なんとミセス・スローカムでした。長野君は初めて蓮を観たので、赤いとしか思えなかったようです。
 「来年は真っ赤と、真っ白い蓮を送るからね！」と、言いましたら、嬉しそうにニコリしていました。

12月9日、会長からの電話でタイミンが良く、「分根して頂いたミセス・スローカムが、9月4日にサロマ湖で咲きましたよ！」と報告しますと、以前、北広島市の「鶴の湯」でも9月に咲いたとのこと。北海道の蓮根付けは、気候的に5月初旬から中旬頃が無難そうです。

※同封の「しおり」は関戸慈誠会員からのプレゼントです。